

のについての記録は一つもない。一體此のイネ屬 (*Oryza*) は主として熱帯の産であつて歐洲を除く諸大陸には何れも多少づゝの野生種を有して居るがその内でアフリカは種類の数が最も多く ROSHEVITY によればイネ屬の分布中心地であらうとの事である。それに次いで種類の多いのは亞細亞洲であつてその内でも分布の最も廣いものは *Oryza sativa* LINN. 即ちイネで、現在イネと云つて居るものゝ内には可なり色々な型があるらしく事によつたらもつと細かく分けられるべきものかも知れぬ。

此の最も重要な作物であるイネ即ち *Oryza sativa* LINN. が本邦にも野生する事が判つたのは頗る愉快である。昨年臺灣に旅行した際に同地の西北部の低濕地にイネの野生種があるとの話しは聞いて居たのであつたが實見する機会がなくそのまま歸つてしまつた。その後、臺北市在住の島田彌市氏から新竹州で採集した標本を送つて頂いたのでそれが *Oryza sativa* LINN. の自生品である事が確められた。標本によると葉の細い多年草で穂は花つきが少なく、小花は内地の栽培品よりも細い、尙島田彌市氏によると小花は熟すると順次に脱落してしまふ由である。或は此の野生品が後日品種改良の上に何か貢獻する所があるかも知れぬとも思はれるので本誌の餘白を借りて報告する事にした。終りに臺北、島田彌市氏の御厚意に厚く感謝する。

Aquilegia akitensis Huth はヲダマキなり

大井次三郎

ミヤマヲダマキに此の學名を用ひるのは本當ではない、此の *A. akitensis* HUTH. は故 U. FAURIE 氏が秋田で栽培して居るものを採集したのが原標本である。これは本邦で廣く栽培されて居るヲダマキ即ち *A. flabellata* SIEB. et ZUCC. なる學名を有するものに外ならぬ、それでミヤマヲダマキはヲダマキの原種と考へて

Aquilegia flabellata SIEB. et ZUCC. var. *pumila* (HUTH) OHWI = *A. Buergeriana* var. *pumila* HUTH in Bull. Herb. Boiss. 5 (1897) 1090 を採用するのが一番正鵠を得たものと考へる。*Aquilegia Fauriei* LÉV. et VAN. (1906) はミヤマヲダマキの學名ではあるがそれよりも前に同名異物があるから使ふ事が出来ぬ。

龍舌菜の學名に就て

北村四郎

植物研究雜誌 第七卷六號 (昭和六年四月三十日) 二百二十頁に 牧野富太郎博士は

June, 1934.

117

リュウゼツサイと稱して作つてゐる きく科の壯大な一年生の草本があつて 其の葉を 雞などの飼料にするとのことである、是れはちさの一變種 *Lactuca sativa* L. var. *angustata* HORT. と稱するものであるとの御説が載つてゐる。

次に同卷九號歐文二十三頁には *Lactuca dracoglossa* MAKINO, 和名龍舌菜として 新學名を發表され 立派な記載と寫眞とが出してある。そしてアキノノゲンに類縁のあるものであるとの御説である。

昭和七年十號の植物學雜誌 六百三十頁には 中井猛之進博士の龍舌菜に關する御説が發表されこゝでは *Lactuca Scariola* L. var. *integrata* GRENIER & GORDON=*Lactuca sativa* var. *angustata* HORT. そして *Lactuca dracoglossa* MAKINO を Syn. に引用されてゐる。尙アメリカより最近輸入のものなりとの御説である。

筆者が始めて龍舌菜の標品を見たのは 昭和六年初春で 故二階重樓氏が萩町の同家で培養され、昭和五年十月十五日に 標品にされたのを 小泉源一博士が示され 學名をしらべなさいとの話で 小生は其の時アキノノゲンの變種と思ひますと返答した。

其の後同年十月十一日 駿河の龍爪山に 黒澤美房氏と登山する途中 附近の民家で栽培してゐるのを見、其の數株を乞ふて標品とした。

昭和七年正月から臺灣に採集旅行したが 臺北附近でこれを栽培してゐる。島田彌市氏に御たすねしたところ、これはずつと前から 臺灣で栽培してゐる植物で 臺灣の田舎に澤山栽培し ブタに食はすとの御話で 同氏のおはからひで 新竹州竹東で其の畑を見たがこゝでは 1) 葉が全邊で葉脈上に赤味を帯びるもの、2) 葉が全邊で葉脈に赤味を帯びぬもの、3) 葉が羽狀に切れて葉脈上に赤味を帯びるもの、4) 葉が羽狀に切れて葉脈上に赤味を帯びないもの 四通りが混合して生育してゐる。島田氏の御厚意により種子を送つてもらつて、昭和八年には 京大の植物園で栽培し 種々の型を研究する事が出來た。

其の結果本種の果實は *Lactuca Scariola* L. のと異なり、即ち本種ではアキノノゲンと同じく扁平で三脈が明瞭で 嘴は大變短かく $\frac{1}{2}$ mm. 位で廣楕圓形で黒色である。*Lactuca Scariola* L. ではより厚味があり、同一面に十脈が明かで嘴は大變よく發達し 4 mm. 程あり倒楕圓形で前者より狭い。

故に *Lactuca Scariola* L. 群でなくアキノノゲン *Lactuca indica* L. 群である。

尙中井博士の *Lactuca Scariola* L. var. *integrata* GRENIER & GORDON (龍舌菜) は 牧野士博の *Lactuca dracoglossa* MAKINO (龍舌菜) とは異なり、坂庭清一郎氏が昭和七年五月に採集し送られたもので、この種子は興農園が米國より輸入しこれを龍舌菜として坂庭氏が求められ 龍舌菜なりとて東大に送られたもので 中井博士の龍舌菜と

牧野博士の龍舌菜は和名は同一だつたが植物そのものが異なつてゐたのである。故に中井博士の學名の檢定は正しいのである。

筆者は龍舌菜の名稱を牧野博士の *Lactuca dracoglossa* MAKINO に残し *Lactuca Scariola* L. var. *integrata* GRENIER & GORDON にはマルバチシヤなる新和名を與へたい。尙 *Lactuca dracoglossa* MAKINO は上記の如く臺灣には古くより栽培され且つ其の附近に生ずる *Lactuca indica* L. アキノノゲシとは殆んど區別されない切葉で無絞のものが出て来る。この中間型のものを *Lactuca dracoglossa* × *L. indica* と考へられるが、私はどうも今でも *Lactuca dracoglossa* MAKINO は *Lactuca indica* L. var. *dracoglossa* (MAKINO) KITAMURA とした方が良い様に考へてゐる。

終りにのぞみ筆者は昨年東大で勉強させて頂いた節特に中井先生は自由に標品を見せて下さつて且つ御私有にかゝる貴重なる圖書を拜覽させて下さり尙種々菊科につき御教示下さつた事を深く感謝する次第である。

抄 録

川崎繁太郎, 今野圓藏: — 朝鮮平安系の植物 I. II. III. (1927-1934), 古生代の植物化石 (1933).

日本群島では中生植物代の三疊紀最上部より以前の植物化石はないが、朝鮮半島では古生植物代中石炭紀最上部と二疊紀の植物化石がわかつてゐる。

朝鮮では寒武利亞紀から奥陶紀に至る海成の整合累層なる朝鮮系の上に平行不整合を以てはじまる平安系と云ふ累層がある、平安系は上部石炭より三疊紀に至るまで整合せる大部分陸成の地層である。

平安系は岩質と化石とから四の統に分けられてゐる、最下部は紅店統と云ひ、石炭紀最上部のものであるが化石は少くて *Lepidodendron oculus-feris*, *Neuropteris* sp. の二が發見されたのみである。紅店統の上は寺洞統と云ひ下部二疊紀のもので澤山の化石を産する、其上は高坊山統と云ひ上部二疊紀のもので化石を産し、最上部は太子院赭色岩統又は綠色岩統で三疊紀のものであるが化石はない。

寺洞統には 115 種、高坊山統には 63 種の化石が發見されたが、兩統に共通のものは唯三種である、之れ高坊山統の下部 320 米突の地層が無化石で此に大なる時間の間隔があるからである。

寺洞統の Flora: — 寺洞統は二疊紀下部にして當時の北半球二疊石炭紀植物要素